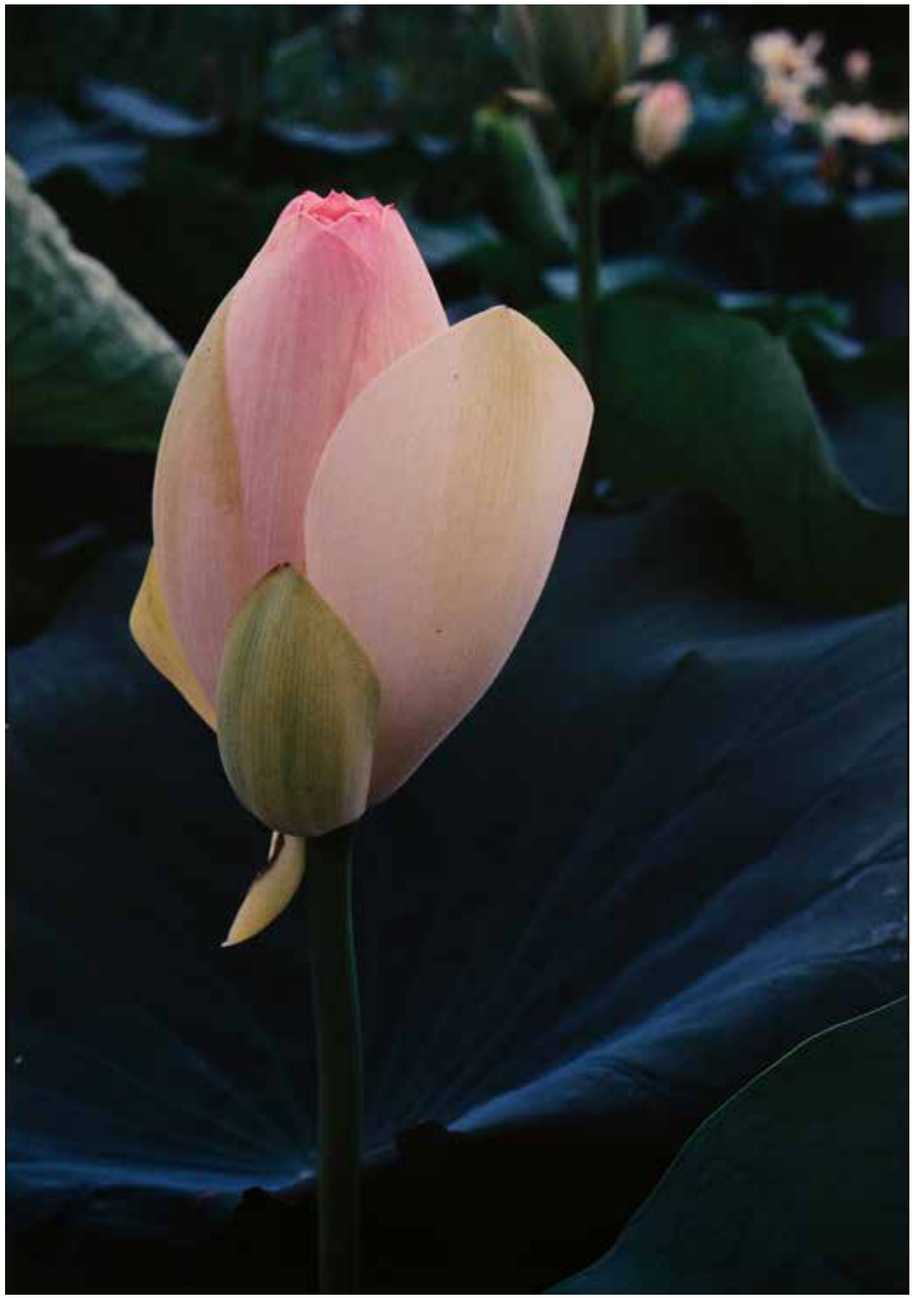
# LOTUS

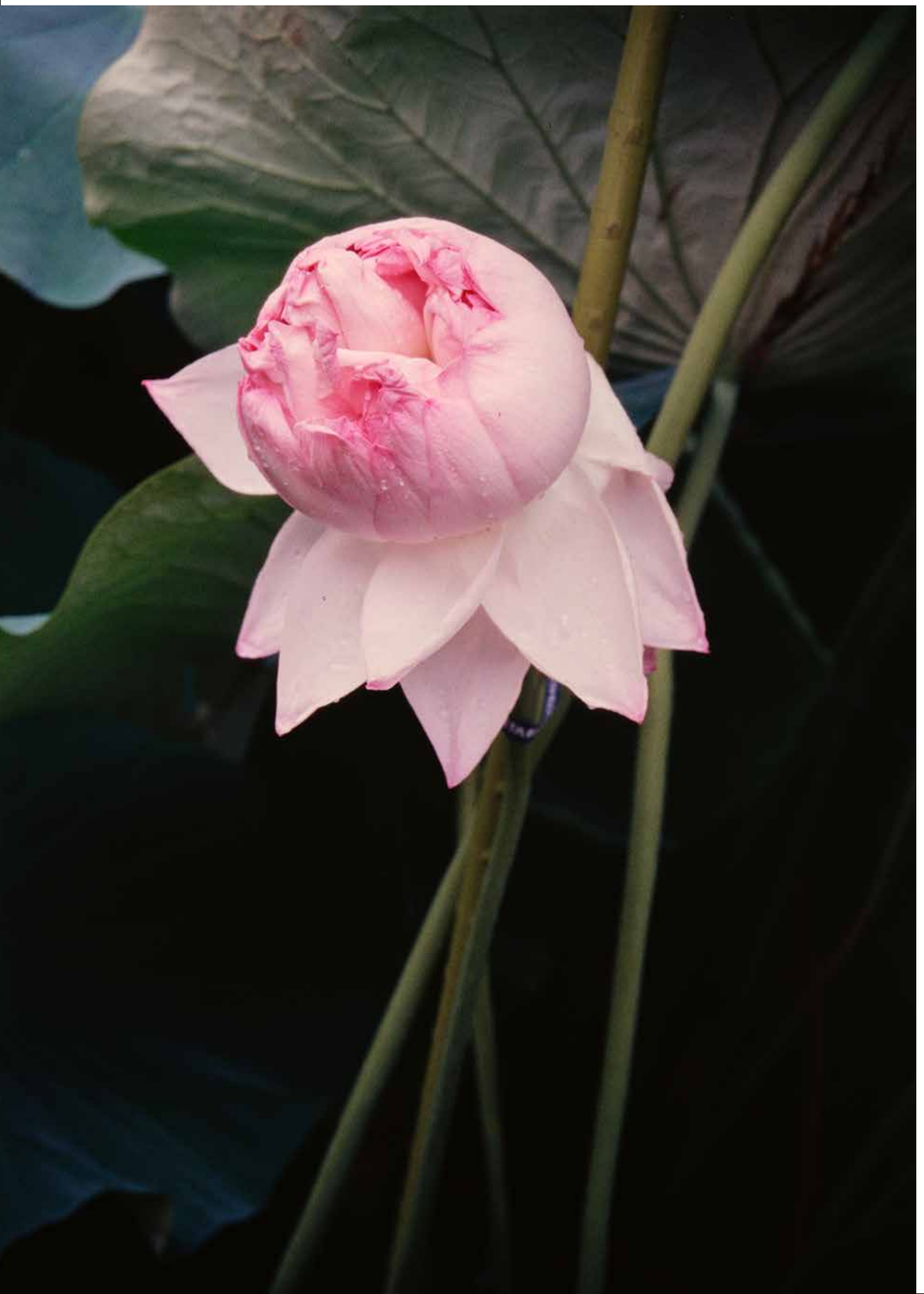
Hitomi Watanabe

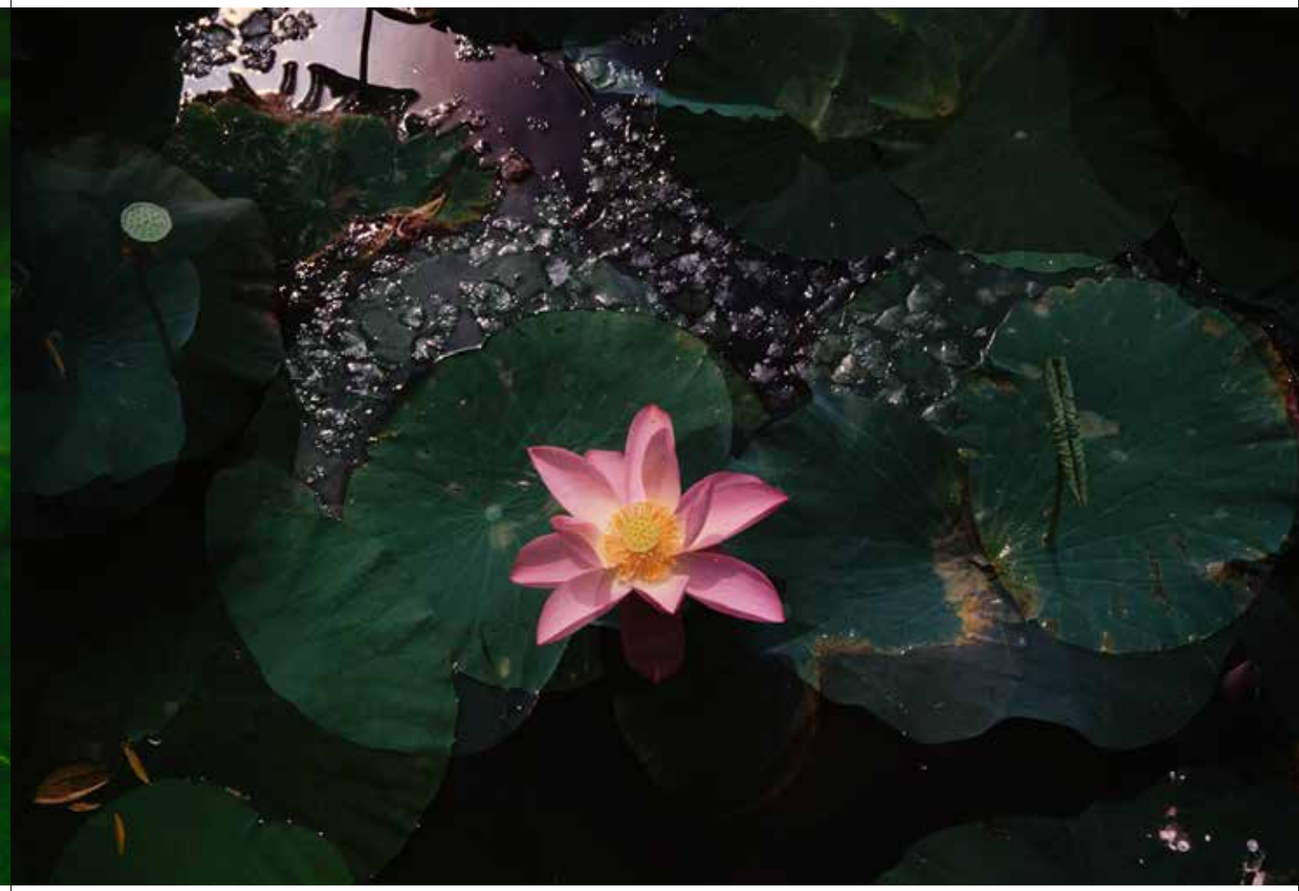


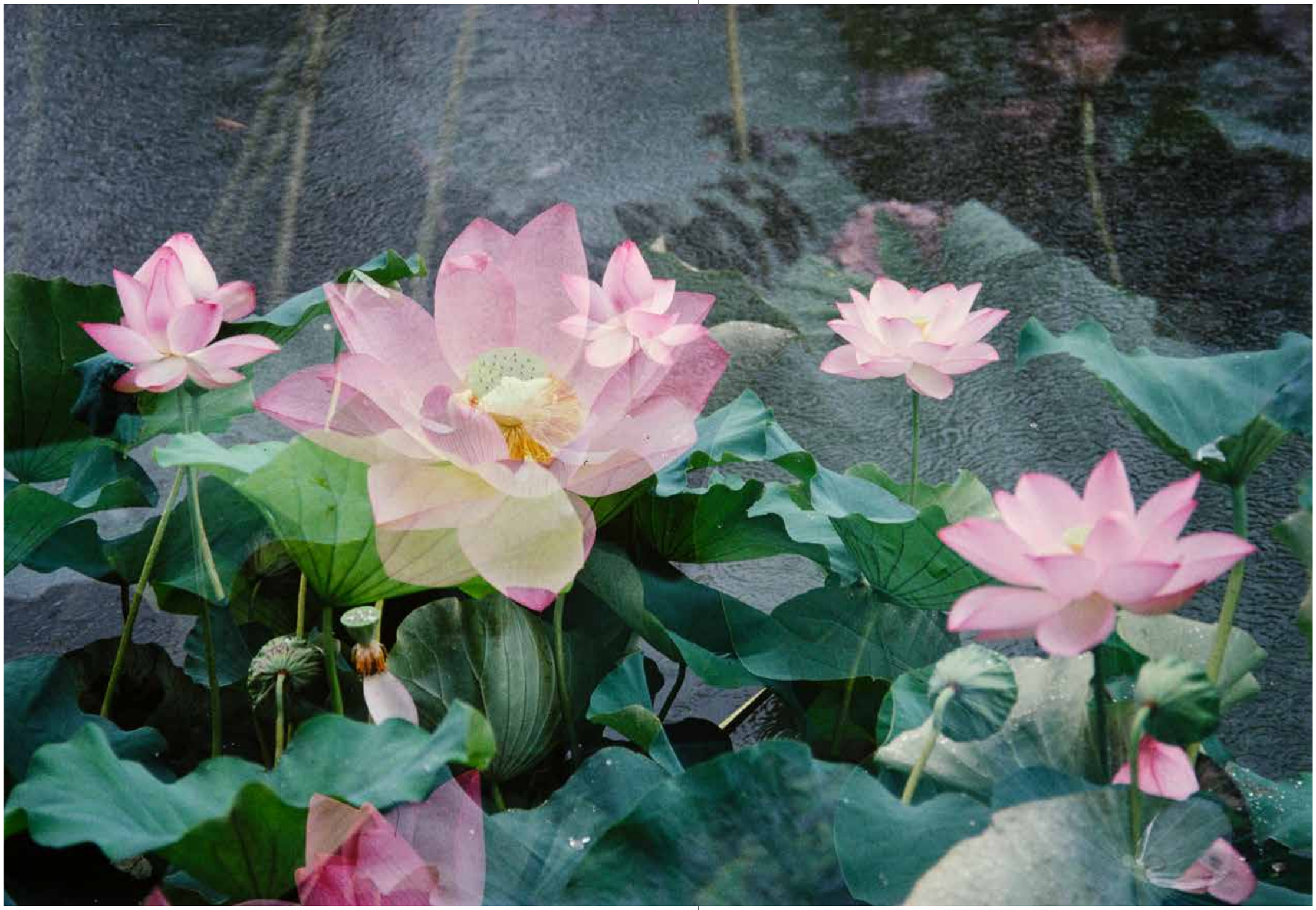
# LOTUS

Hitomi Watanabe

YASOSHA







いまは昔、インド、ブッダガヤ。
日中は50度にもなる、熱い季節、熱い場所――

５月のある早朝、
寺院の境内にある蓮池にむかって坐っていた。
かすかに、ポッ、ポッと花弁がひらく音が聞こえる。
あたりにはやさしい香気もただよっている。

ほのかな香りにつつまれていると、
目の前の蓮の林が大きくゆれ、
細長いカヌーを漕ぎながら、村娘があらわれた。
献花のためなのだろうか、
蓮の合間を縫うように、まだつぼみの花を摘んでいく……。

あれから年月を経て
宇佐神宮の「原始ハス」に出会ったとき、
水底に沈んでいた記憶があふれだし、
はじまりの合図をきいたのです。

撮影地／上野不忍池・葛飾区水元公園・町田市薬師池公園（東京都）、横浜三渓園（神奈川県）、行田市古代蓮の里（埼玉県）、鴨川・長南町・佐原市水生植物園（千葉県）、草津市水生植物公園みずの森・守山市近江妙蓮公園（滋賀県）、宇佐神宮（大分県）、ケララ・タミルナドゥ（印度）

## 渡辺 眸
わたなべひとみ

東京都生まれ。明治大学を卒業後、東京総合写真専門学校で写真を学びカメラマンの道へ進む。写真学校の学生時代には、屋台で働く香具師の世界を3年にわたり撮影し、卒業時の制作展で「香具師の世界」として発表。その後、東大安田講堂事件や新宿の学生運動など60年代の社会運動の現場を記録。特に東大安田講堂事件では唯一撮影を許された写真家としてバリケード内に留まり、東大全共闘と活動を共にしながら1969年1月の安田講堂攻防戦、大学内での集会やデモを含め、同年9月までの闘争の日々を撮影しつづける。1972年、アジアに旅立つ。なかでもインドやネパールの風土と文化に惹かれ、魂の源郷と感じ滞在する。以後、アジア諸国の旅をつづけるなかで作品を発表。1983年、インド・ネパールでの魂の軌跡をまとめた写真集『天竺』を刊行し評価をうける。1991年から99年まで岩波書店の「世界」で「global friends」と題してグラビアページを連載。

主な写真集に『天竺』（野草社 1983）、『猿年紀』（新潮社 1994）『西方神話』（中央公論社 1997）、『てつがくのさる』（ナピポ 2003）、『東大全共闘 1968-1969』（新潮社 2007）、『1968 新宿』（街から舎 2014）、『TEKIYA 香具師』（地湧社 2017）など。パブリックコレクションとして東京都写真美術館、パーソナルコレクション多数。